

いま、
きみのいる
場所

～『私に影響を与えた一冊』に寄せて

『ブライト・ライツ、
ビック・シティ』
(ジェイ・マキナニー著 高橋源一郎訳)

檜崎 六呂 著

『きみはそんな男ではない。』

夜明けのこんな時間に、こんな場所にいるような男ではない。』

出だしで突然眼に飛び込んできたこの文章に、

二十年前、高校生だった私は強い衝撃を受けたことを思い出す。

もちろん二人称という、読み慣れない描写であったからかも知れなかったが、それ以上にこの出だしの文章が、まるで鬱屈した高校生活を送る私の気持ちを看透かしているように思えたのだ。

当時の私は、とにかく毎日を緩慢に過ごしていた。

普通に学校に行き、

普通に勉強をして、

普通に部活をして、

普通に家に帰り、

普通に読書をして、

普通に眠る。

普通、普通、普通。

ありきたりすぎる普通の毎日が分厚い空気の塊となり、私を押しつぶそうとゆつくりとその重さを増していくように思え、そんな圧力から逃げ出したくて物語に逃避する毎日を過ごしていて、そして、ある日図書館で、この本、ジェイ・マキナーニー著、高橋源一郎訳の『ブライト・ライツ、ビック・シテイ』に出会ったのだ。

『きみは、自分がほんとうはどんな男なのかよく知っている。君は日曜の朝早起きして、「タイムズ」とクロワッサンを買いに出るような男なのだ。』

物語の出だしは、とても静かに始まった。

最愛の人に去られ、小説家になろうという夢を挫折しかけている『きみ』が、それでも現実と向き合うだけの勇気が持てずに、女と酒とコカインに溺れている。ここにいる自分は違う自分なのだ、といつも思いながら、それでも抜け出すことができないでいる自分に苛立ちを感じながら、それでも現実と向き合うことができずに居る。

物語を読み進めていくと、まるで自分が八〇年代のニューヨークをさまよう『きみ』をカメラで追いかけているような錯覚に陥り、不甲斐ない『きみ』の様子に苛立ちすら覚えるようになる。

なぜ動かない。

なぜ前に進まない。

そんな焦れた思いが、当時の私の鬱屈した感情とリンクし、私は無我夢中で、それこそ時間も忘れて先へ、先へと読み進めていった。

『サクス百貨店の前に立ち、きみはマネキンを見つめている。……別れる頃の彼女はこれとそっくりの表情をしていた。虚ろな瞳、そして固く閉じられた唇。

いつの間に、彼女はマネキン人形になってしまったんだろう。』

読み進めていくうちに、『きみ』はヴィッキイという女性と出会い、仕事をクビになり、その中で過去を振り返り始める。

喜びと、将来への希望と、挫折と、絶望と、

そして哀しみに包まれた過去を、静かに告白する『きみ』。

それは誰にでも起こりうる、何気ない日常の悲劇であるし、『きみ』自身もそれがありふれた出来事であることを認識しているように見え、それが当時の私にはとても哀しく感じられたものだった。

(才能も意欲もなく、愛情も手に入れることができない男に、どんな明るい未来が待っているというのか)

『きみ』の告白が鋭利なナイフとなって、私のそんな鬱屈した感情の根底にあるそんな想いを、容赦無く抉り出していく。

私は苦しくて読むのをやめようと思うのだが、それでも指はページをめくっていった。

『「あなたが生まれた時の痛みに似てるのよ。変に聞こえるでしょうけど、でもほんとうにそっくりなの』』

『きみ』の過去への旅は、弟の登場により更に遡り、癌に侵された母親と過ごした最後の夜へと辿り着く。

書き進めていて、ふと思いだした。

確か私はこの時、泣いたのだ。

幼い頃から母親の愛情というものをまともに受けたことのない、母親の愛情に飢えていた私は、母親に愛されていた『きみ』と、『きみ』が愛していた母親を『見て』、何故か救われたような気持ちになり、涙を流したのだ。

そしてラスト。

大好きだった母親の優しさを思い出し、そして現実と向き合うことを終えた『きみ』はいよいよ前へと足を踏み出し始める。

自分の欲望のために『きみ』の元を去った妻との再会で馬鹿のように笑い倒し、ヴィッキイに自分の本心を全て打ち明け、そしてまた朝焼けに染まるニューヨークの街に足を踏み出す。

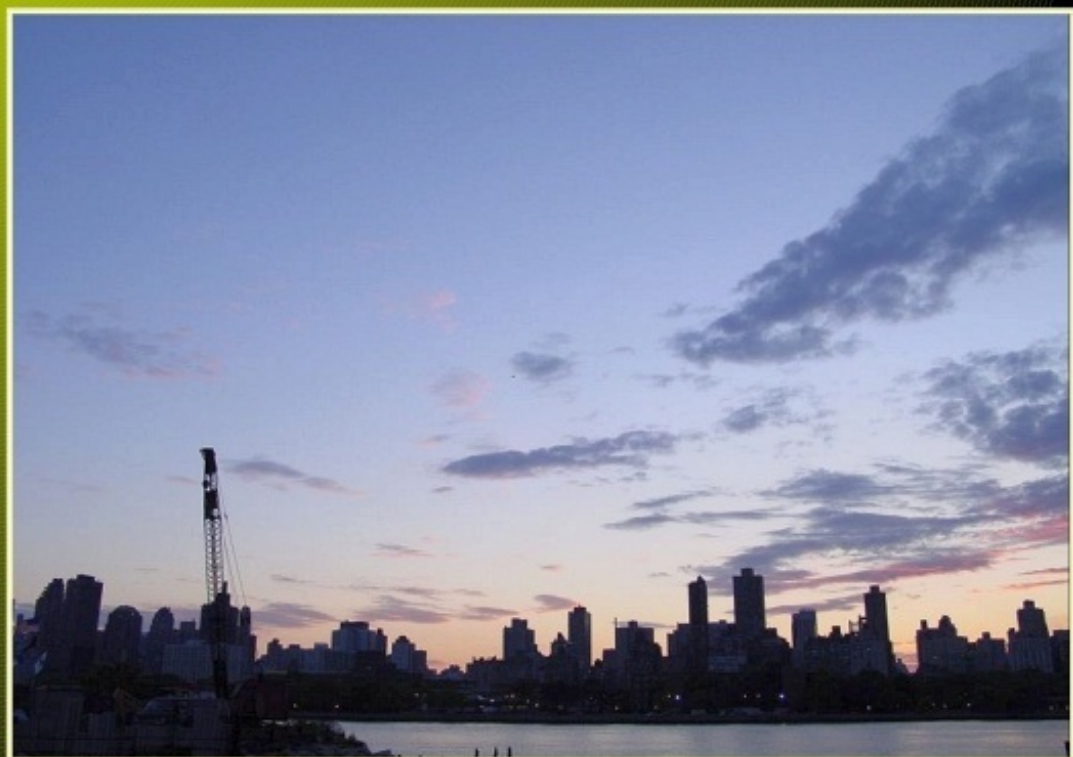
『ゆつくりとやらなければならぬ。きみは何もかも初めからやり直さなければならぬ。』

このラスト一行を、私は二〇年経った今でも鮮明に思い出せる。

この一行があつたからこそ、いや、この本に出会えたからこそ、今の私がある。

失つた過去を取り戻すのではなく、失つた過去をも受け入れ前に進むうとすること。それを教えてくれたこの本こそ、私の人生において最も影響を及ぼした本であるのだろうと思う。

(了)



いま、きみのいる場所

～『きみに影響を与えた一冊』に寄せて

『ブライツ・ライツ、ビック・シティ』

(ジェイ・マキナニー著、高橋源一郎訳)

檜崎 六呂 著

表紙・裏表紙写真:

無料風景写真素材集

<http://www.pixelsphinx.com/>